

【Session 2-3】

謝 聰輝

「南台湾和瘟送船儀式とその身体技法・パフォーマンスに関する分析と考察」

丸山 宏

1 研究上の貢献

謝教授の論文における大きな貢献は、数年来、謝教授が精力的に取り組んでいる台湾南部における道教科儀の古い写本を新たに利用するという作業と関係している。謝教授は、従来、シペール、大淵忍爾の収集した台南の陳栄盛道士の写本、新竹のサソーの収集した莊林統道蔵のみが知られ、その他は細々とした写本利用であったところを、特に南部の高雄、屏東を中心に清朝中期に遡る写本を大量に収集し分析の手段として有効に活用している。

これと関連して、高雄や屏東の道壇の故郷である福建の泉州地域においても道壇を訪問し淵源関係を追究している。この点は、本論文にもよく現われている。

2 論文の中の幾つかの重要な知見

謝教授の論文では、(1) 送船儀礼の事例を歴史的に考察し、宋代の神霄の道法では個人（家単位）で挙行したが、明から清の福建では、宋代の部分的伝統は受けつつも、共同体（地域単位）での挙行へ移行したことを指摘している。(2) また泉州と漳州の違いを、台湾南部では鳳山道と台南道の違いとして意識的に取り上げているのも、従来の研究にはなかった視点である。鳳山道においては、台南道よりも、紅頭法が多く使われる面があり、そのことが両者の違いを示す一つの基準になっていることは興味深い。この違いは評者も伝度儀礼の文検を通じて考察したことがある。(3) 論文において瘟神や瘟鬼を儒教的には王爺と捉え、道教的には天仙と捉えているという、認識の差異を指摘した点が注目できる。特に送船の行き先が何処であるかという点も考慮して検討されたことは興味深い。(4) 謝教授は、1821年の道教の写本内容福建で実際に瘟疫が流行した歴史的な記録と組み合わせて論じていることは、歴史における送船儀礼の理解に非常に有意義である。(5) 謝教授の論文は身体技法、具体的な身体技法を伴うパフォーマンスの鳳山道と台南道の差異について検討している点は、船に関する民俗学的な視野からも興味深い貢献である。

3 評者の調査体験

評者は、1980年代末に、台湾南部の台南県の西港、台南市の安平で台南道の王醮儀礼を見学したことがある。またおなじく高雄県の岡山で、鳳山道が行う火醮と水醮の儀礼における送船を見学したことがある。これらの事例を利用しながら、謝教授の論文に関係する点をいくつかシンポジウムでは報告したい。